かるちゃ～ナビ

ザ・見遊（みゅ～）じあむ ……63

旧西尾家住宅

（吹田市）

明治から昭和初期の生活・文化を体現

吹田市南部の街中に、明治から昭和初期にタイムスリップしたような広大な庭園・邸宅があります。江戸時代から天皇家に米を納めていた仙洞御料庄屋屋敷であった旧西尾家住宅で、敷地は4200㎡もあり、2009年に国の重要文化財に指定されました。建物はいてあります。西尾家は、明治から昭和にかけて活躍した著名人とも関わりがあります。この住宅の一室で1909年（明治42年）、天才音楽家と言われた貴志康一が産まれました。当主の友人であった植物学者・牧野富太郎も、たびたび来訪して交流を深めました。離れ棟の一室には、棋士・阪田三吉が、将棋の指南で訪問したときに使っていた将棋盤も残っています。

「関西建築界の父」とよばれ、淀屋橋や桜之宮公園を手がけた建築家・武田五一が設計。7棟ある建物の外観は和風ですが、離れの棟の内部は、ステンドグラスがある見事な洋風で、応接セットやビリヤード台も置

主屋、茶室、離れ棟、米蔵、土蔵など7棟の建物があります

離れ棟の内部は洋風仕立てに

ミュージアムメモ

▶所在地／吹田市内本町2丁目15番11号▶交通／ＪＲ吹田駅・阪急吹田駅より徒歩10分▶開館時間／9時～17時15分▶休館日／12月29日～1月3日▶観覧料／無料▶連絡先／06-6381-0001

このシネマがえいが

「武士の家計簿」

江戸時代の末期、刀ではなく算盤で家族を守る武士がいた

「桜田門外ノ変」に続いて今月も時代劇を。江戸末期の加賀藩、武士であっても、刀ではなく、そろばんで家族を守った侍一家の物語です。その名は加賀藩御算用者の猪山直之。

御算用者とは、藩の財政担当というべき会計経理の武士のこと。身分は下級武士で、加賀藩では150人もおり、日々「御算用場」という職場に詰めて、藩の公金の出入り、藩士の給金計算、年貢米の管理、酒や塩の生産販売管理などの業務を行っていました。

直之は異例の出世を果たしますが、同時に冠婚葬祭はじめ様々な出費もかさんで、家計は借金が重くのしかかってきます。家計の財政再建に直之は思いきった手を打ちます。家財道具の売却から美術品まで現金化。衣食住の切り詰めでは、祝宴の鯛を絵に描いた鯛にしてしまうところは笑えます。

算盤をはじくシーンがたくさんでてきますが、出演者たちの算盤の腕前がちょっと気になるところ。また、映画では御算用に関わるエピソードだけでなく、藩の上役たちの米蔵の不正事件も描かれますが、こちらは今で言う「内部告発」もできなかった時代だけに、主人公が得意の財政感覚で不正と対峙するあたりも見どころです。

映画の原作は『武士の家計簿―「加賀藩御算用者」の幕末維新』（磯田道史・茨城大学准教授）。

摂津 河内 和泉 おおさか三国誌 ……63

（大阪市西区）

岩崎弥太郎と土佐稲荷神社 明治政権と結びつき大財閥にのしあがる

今年のNHK大河ドラマ「龍馬伝」にも登場した明治初期の実業家・岩崎弥太郎（1835～1885）は、三菱財閥の創設者として有名です。弥太郎が経営した三菱商会が、現在の大阪市立中央図書館隣の土佐稲荷神社にありました。ここは「三菱発祥の地」とされており、三菱のマーク・スリーダイヤが神社の紋章になっています。明治初年に稲荷神社を譲り受けた弥太郎は、ここを拠点に事業を営みました。土佐出身の政府高官・後藤象二郎から、各藩の藩札を新政府が買い上げる情報を事前にキャッチし、藩札を大量に買い占めて新政府に買い取らせ、巨額の利益を得ました。今で言うインサイダー取引であり、弥太郎は維新直後から政商として暗躍しました。台湾出兵や西南戦争で軍事輸送を引き受けるなど政府の仕事を独占して受注し、三菱は一大財閥にのしあがります。弥太郎の強引な商取引には世論の批判も強く、「三菱の暴富は国賊なり」と農商務卿であった西郷従道（隆盛の弟）が公然と非難。渋沢栄一や三井、大倉などの他の財閥が三菱に対抗して、熾烈なダンピング合戦を繰り広げました。今日の日本財界の源流となった弥太郎は、ライバルとの競争の最中、1885年に51歳で病死し、波乱の生涯を終えました。

土佐稲荷神社（地元では桜の名所になっています）

岩崎弥太郎

大阪の戦跡を歩く 第62歩

府民の寄付で建立した「自由の塔、女神像」

市長の手で題字が刻まれた女神像

平和の女神像

（大阪市浪速区）

難波の高島屋前に、平和を祈念する2体の女神像が立っています。この場所は1945年の大阪大空襲で一面が焼け野原になりました。南側にあるブロンズ像は、1950年に府民の寄付で建てられたものです。当初は心斎橋にありましたが、2009年に今の場所に移転しました。北側の白い像は当時の大阪市長の書で「朗風」という題字が刻まれ、1953年に建てられました。女神像は今日も、ミナミのにぎわいを見守っています。

いまも心に響く 名詩・名歌・名語録

美しい笑いは家の中の太陽である

サッカレー

イギリスの作家、ウイリアム・M・サッカレー（1811～1863）の言葉。家族とともに過ごす時間は、笑いに満ちたものでありたいという願いが込められています。サッカレーは幼くして父を失い、母も再婚し、寄宿舎で育ちました。この言葉には、本人が実現することのなかった、温かい家庭への思いが込められているようです。

人間は植物が無くては生活の出来ぬ事である

牧野　富太郎

植物学者・牧野富太郎（1862～1957）が自伝で語った言葉。「植物は人間がいなくても、少しも構わずに生活するが…」の後に続きます。植物のたくましさ、人間の弱さを表しています。この言葉は、人間がおごり高ぶって、植物の生態系を破壊してしまえば、人間自身を破滅に導くという警告にもつながっています。